J．C．O．S．M

Vol. 18, No. 4 （July.1988）

全科協ニュース

1988年7年1日発行
（通巻 第102号）
全国科学博物館協議会
東京都台東区上野公園
国立科学博物館内
〒 110
Tel.03-822-0111（大代）
Fax. 03-824-3298

おもな内容：◇第17回全科協博物館事業研究会報告
◇徳島における新しい県立博物館の建設　◇加盟館園の紹介

第17回全科協博物館事業研究会報告

事業研究会に参加して

たばこと塩の博物館　大塚昭二

いつもご熱心に研究会のお世話をしていただいており，取り上げられるテーマも今日的で，その度に新鮮で心が洗われるようなすがすがしい気分にしていただいて，感謝しております。

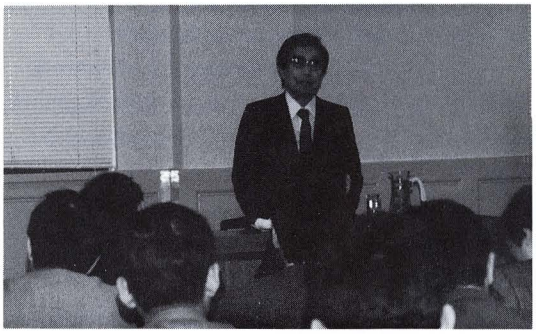
① 今回は，直々に諸澤館長の話を聞かせていただき感銘を深めました。博物館をとりまく情勢・学校教育における博物館見学利用への箴言，それと，国立科博の組織改変により取り組みや研究者への期待像，その立ち向かい方，ボランティア制度導入のキーポイントや競争機能を具備することの必要性など，結果の説明ではなく，達成すべき問題としての認識のもとに，どのように取り組んでいるのかという現実を提示してくださったので，励まされることの多いお話しでした。

なかでも研究者の，行動として期待される姿勢へのご提言は，明日を開く扉として共感しました。

それらが，「たんけん館」での教育普及活動のなかで実践によって裏付けされている点にはさらに感銘をふかめた次第です。

② 千葉大学の坂本先生の「人格の構造」の説明において，“意欲（関心）”を育てることの少ないことの問題を指摘されましたが，ではどうするのかという手掛かりは，学習者への関心を示すことにあると説明されたように聞きました。

記憶力偏重教育の申し子のような，知識はあるが出来ないという人は論外としても，やる気がないというよりも行動を起こすべきチャンネルを初めから持ち合わせていないような研究者を見るにつけ，人格の構造のご説明には身につまされる思いがいたしましたが，“意欲”を育てる場は，学習課題そのものの中にこそあるように思えるのです。つまり，学習者の対象としているものが，どんな関わりをもつものか。そして，その意義や存在価値や重要性の認識の成立を通して，意欲は増大される性質のものではなかろうかと思います。



講演中の諸澤国立科学博物館長

③ 附属自然教育園の矢野先生の実習と，発表・討議が研究会の中心テーマでありましたが，生の事柄であるため，この時間は迫力のある充実したものになりました。示唆に富むこのような企画は今後とも継続していただきたい事項です。

ところで，昨年の研究会でのフィールドワークの発表討議の中で，安全についての考え方に若干の疑問を抱いたことがありました。

つまり，その行事の参加者にとって「軽傷ぐらいしないことには，よい経験にならない。」という考え方についてであります。

しかしながら，博物館で行なう科学教育の指導者にとって，安全確保の技術は大事な資格要件のひとつなのではないでしょうか。また，カリキュラムの内容にも，安全行動の訓練を基本的な項目として，組み入れられていなければならないと思うのです。また，安全が確保されなかったような結果は“学習の成果”とは言わないと思うのです。

将来，全科協博物館事業研究会で，教育普及活動におけるベースとしての安全の在り方について，取り上げていただける機会を希望します。

ここには，講演を聴きながら自分でメモしたものをもとに，講演内容をまとめてみました。聴きもらしや意味のとり違いがあるかも知れませんので，出席の方々からのご意見も合わせてお尋ねくださるようお願いします。

国立科学博物館諸澤正道館長の講演

「これからの教育と科学博物館」を聴いて

① 国立科学博物館のとりくみ方（63年度の企画の考え方）

4月から機構改革をする。当館には自然史の研究の充実はあったが、教育普及を表に出して充実させるべく，教育普及部を二つに分けて普及部と教育部とし，それぞれの部に新しい課を作ることで，まとまった活動に立ち向かわしめることとした。

普及部　普及課…PR・情報・外への働きかけ
　　展示課…展示企画・実施
教育部　企画課…各種の教育活動の企画
　　科学教育室…教員経験者による現場指導

アメリカでは普及活動が盛んである。各市に自然史博物館があって，その間に競争がある。普及活動の競争が，効果となって現われている。

ヨーロッパでは，各国に数は少ないがヨーロッパ圏というなかで競争がある。

日本の博物館では，この競争するということが少ない。規模や内容に差があるためではなくて，親方日の丸なんだ。競争がなくて，ただ予算を使うということではだめです。公立でも国立でも，多少無理があっても取り組むことだ。競争の原理が働かないと互いにだめになってしまう。

② 国立科学博物館分館（新宿）に研修研究館が，7月にオープンする。動植物・地学などの研究活動は，実物や標本でやってもらおうというものだが，ここでの，実際の教育普及活動を担当するのはインストラクターの勤めということだけでなく，研究者が，その成果を自分だけのものにせずに，自ら出かけて一般の人に分け与えることが大切なことで，これが，研究者の層を厚くすることにつながるのである。

日本では比較分類学の研究者の層が薄い。

熱心に講演を聴く参加者

自分の研究に没頭していればよいのでなく，それを，多くの人に分け与えることが必要で，大事なことなのである。

③ 臨教審（第4次最終答申62―8）

「生涯教育」という名称を「生涯学習」に変えた。いままでの，教育を与えるという側に立つのに対して，“学習する側が自ら学ぶ態度を作る”という認識である。態度・意欲・関心を育てることが少なすぎた。

何か事が起こると，みんな学校の責任だというが，“しつけ”を学校の責任として負わせることはよくない。道徳教育の振興ということを声高らかにいうのは，親の自覚を遅らせる。“しつけ”は家庭に大きな責任があることである。

学校の団体見学は“見物”であって見学ではない。引率者の先生はこれを教育活動として一つのキッカケにすることが大切だ。

高校の社会科を地理歴史科と公民科にするが，この昭和22年に制度として発足したものを分けたことには意見があるが，これも一つの考え方であろう。しかし，社会科の本質は，子どもの身辺の事象を総合的に勉強すること，物事を体験に則してやることがよいという考えに基ずいたものなのだ。ただ，体験形は系統的に教えることのポイントが欠落することがある。反面，分離するのは，倫理・政治・経済・世界史として，それぞれ独立したものとして受けとめられてしまい，総合的に包括的に教えることがない。万能の先生はいないから特定の単元に集中してしまうことになるが，小学校から高校までは，経験主義思想による体験学習は大切にしたい。

教員の資質の向上ということが，よく言われる。充分ではないというのである。先生もどちらかというと暗記型になっていて，自分で判断するとか考えることを不得意とする。定まったとおりに教えるだけでなく自らの思考力・判断力・直感力があって，子どもの本性を引き出すことのできる先生が少ない。

今年から初任者研修を始めることになった。一年間指導教官をつけ，教育の意識をしっかりつけてもらうことになった。これが効果的にすすめられるように期待して

講演中の坂本千葉大学教授

いる。

④　ボランティア制度の導入について

博物館の展示にインストラクターを配置すべきだが人員的にも限界があるので，ボランティア制度をいれて2年になる。現在，百数十人の登録になっている。内訳は男子1割で，他は婦人・女子学生。みんなハキハキしている。懇談会でも話題になるが，老人や病院での奉仕と違って，ここに来ることで，学生時代に勉強したことをもう一度思い出すことが強いということだ。

博物館のボランティアを“自発的に援助するもの”という捉え方ではだめである。博物館へ来ることは“自分が勉強するためにくるのだ”という意識で来てくれないと成功しない。自分で一生懸命に勉強して，その勉強したことを来館者に分かつという意識が大切なのである。

今後，博物館の活動を活発にするために，ボランティアに頼るということが多くなろう。小人数でもよいから，自分の勉強をするという人を集めて，拡げていくことだ。

その人達に教え込むだけでなく，その発想を大事にしている。だから，やれる限度でよい。ここも初めは9人だった。核になってやれる人は必要だ。

実習中の参加者

千葉大学教授　坂本昇一氏　講演

科学教育と社会教育活動について

1　社会教育が学校教育と同じでは意味がない。社会教育は学校教育の落ち穂拾いではない。付録でもなければ補足するものでもない。科学教育を社会施設でやるのは何故かということを，しっかり押さえておかねばならない。

2　学校教育と社会教育

	学　校　教　育	社　会　教　育
①集団	学級・同年齢・同学区という同質集団。	年齢・地域などファクターが種々ある異質集団。
②プログラム	時間割に子どもが関与しない。（校外活動から特別活動までも同じだ。） 共通の到達度があり，教科書がある。成就水準一定。	子どもが関与したプログラム（なかには無いほうがいいという青年の家もあるが） 子ども達が自分で作るから成就水準は画一的ではない。一人ひとり違っている。
③学習	実物よりも抽象的間接的な教材（教科書中心）。 抽象的に分解して取り出してやる。	実物や直接経験を重視し，自然や総合的場面を重視する。（しかし応用的ではない。）
	（実験室を使って学校と同じことをやってよいのか？それで学校教育とどこが違うのか？ 基礎的なものにも違いがあるべきなのだ。総合的なものの中に基礎的なものがあるでしょう。 体系に分けないものの中に基礎的なものがあるでしょう）	
	知的学習中心	全人的学習中心 （生涯学習がこれだ。生涯学習の概念は，そこで全人的学習をすることにポイントをおいている。もちろん，学校教育で算数をやっているときも全人的学習をしているのであるが，社会教育ではここを強調している。社会教育では，科学的知識を獲得することが狙いであったということでは困るのである。）
④人間関係	先生中心 （教える教えられるの関係） 支配服従・科学の絶対性を強要する。絶対性の代弁者が先生。	子ども中心 発見する喜びが大きい。
⑤学習の場	整えられた環境 抽象的場 失敗や，やり直しが認められる場（社会から隔離されているのは失敗が認められるところだからだ。）	自然を中心にした場 整えられていない場 予定していないことが起こりハプニングが起こる場。
	社会教育の場で，学校の理科の時間と変わりないのでは困る。一方，学校においては理科と社会科を総合して“生活科”となり，「生涯学習」となると，学校と社会教育の壁がとれて分けられなくなる。社会教育がどれだけ充実できるかを真剣に考えてほしい。	

3　人格形成と教育

学校では，ボイルの法則を媒体として人格形成をやっているのであるが，自動車学校ではエンジンを教えても人格形成をねらっているのではない。

人格の構造		
	認識的領域……→	理解
	神経・筋肉的領域…→	技能
	感情的領域……→	意欲（関心）

この三つをやらせないと人格形成にならないのに，このごろの学校では“知識”にはしることのみで，“技能”は減り，特に「意欲」はやらないか，やることが少ない。意欲は本人がその気にならない限り外から与えられないものだ。

決められたことを決められたようにするよりも，自分で考えるほうがやる気が出る。「さらに知りたい」という気にさせる展示・そうなる状況を作れ。成就感がつかめるとやる気が生まれる。しかし，これは個人ごとに違うもの，個別化しているものなのだ。個別的アプローチが役立つときもある。　（以上）

第17回全科協博物館事業研究会　事例発表

青少年科学活動の実践例

和歌山県立自然博物館　調査員　山元　晃
技師　花野政之

1　自然博物館の紹介

今回，事務局から実践発表の機会を与えていただき，心から感謝申しあげます。折角の機会でありますので，当館の簡単な紹介をしたいと思います。昭和54年に国際児童年の記念事業として計画立案され，昭和57年7月27日に開館いたしました。今年で6年目になり，児童・生徒を中心に地域の皆さまに愛される館として教育普及事業等努力しております。

職員数は，館長・副館長・総務課6名，学芸課9名，飼育及び資料整理のアルバイト5名の計22名で活動しております。

この館の特色と申しますと，水族，動物（昆虫），植物の3つの専門分野から構成されております。従って，館内の展示も大きく第一展示室（魚類の水槽展示）と第二展示室（貝・昆虫等の標本展示）からできております。また，館の事業としては館運営，調査研究，教育普及，青少年科学活動促進の4つの事業を行っております。出版活動では，今年度も「親と子の自然博物館（海と生物）」を作製しました。これは第6集の展示解説書として文及び絵をいれ，幼ない子ども達へ夢を与える絵本として作製しました。

2　青少年科学活動促進事業の概要

当館では，この事業を61年度と，62年度の2年間行ってきております。テーマは大きく海と陸に分け，6コースを計画し，各コース10名の募集を行いました。参加者数の状況は表の通りです。参加者の募集は，自然博物館教室の名称で，6コースを一括して行い，第2希望までの応募を受け付けました。

陸上をテーマにした「昆虫の生態・森の樹木を調べる」

	コース名	参加者数 61年度	参加者数 62年度
海	①ヤドカリを調べる	3	
海	②ダンスをするカニを調べる	12	11
海	③磯の生物を調べる	10	10
海	④黒潮の海を調べる	14	14
陸	⑤昆虫の生態を調べる		9
陸	⑥森の樹木を調べる		

※各コースは科学教室及びグループ活動を各々20時間以上行う。

※「ヤドカリを調べる」コースの希望者は，少数のため第2希望へまわった。

各コースの宿泊地

事例発表中の山元調査員

の2つのコースは，場所は新宮市高田で，61年度は2泊3日，今年度は5泊6日の合宿で、集中的に科学教室とグループ活動を行いました。

海をテーマにした「ダンスするカニ・磯の生物・黒潮の海を調べる」の3つのコースは，それぞれ県立白崎少年自然の家（2泊3日），国民宿舎紀州路みなべ（3泊4日），串本海中公園センター（4泊5日）で，7～8月を中心に7～9日間の日程で，学習を展開しました。

各コースとも前半の2～3日を基礎知識の修得や調査を進めるのに必要な器具の取り扱い等に関する教室にあて，後半は合宿形式を主としたグループ活動を行いました。

62年度の子ども科学会議は，11月23日に当館レクチャールームにて，各コースから50名の参加者が集い，活発な質問，討議が行われた。

この事業は和歌山県教育委員会の広報事業の一環として，フィルムに収録されテレビ番組「豊かに生きる―僕たちちびっ子研究者―」として放映されました。

徳島における新しい県立博物館の建設

徳島県博物館館長　中西忠司

徳島県博物館は，考古，歴史，美術，生物，地学，科学・天文・産業の各分野を擁する総合博物館として，昭和34年12月に開館した。来年には満30年を迎えることになる。県民の寄付金によって建設された延床面積2,000㎡足らずの博物館は，当初は全国的にも先進博物館の1つであったと聞いているが，近年では，その施設の狭隘さ，収蔵資料の不充分さはいかなんともしがたく，全国各地で新しい近代的な博物館の建設が相次ぐ中で，徳島でも新館建設が焦眉の課題となっていた。

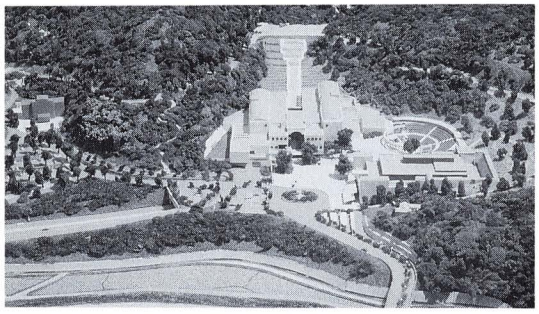
そうした昭和55年1月，徳島県は置県100年のモニュメントとして「文化の森」構想を発表し，その構想の一環として，新しい県立博物館が現在の博物館を引き継ぐ形で建設されることになった。

私どもも，現在，文化の森建設事務局のスタッフと共同して新博物館開設準備に取り組んでいるところであるが，ここに「文化の森」および新県立博物館構想の概要について紹介させていただくことにしたい。

文化の森総合公園

「文化の森」は，徳島市南郊の丘陵地を造成して建設が進められている自然と文化施設が一体化した文化公園である。美しい自然環境を活かした公園の中に，図書館，博物館，近代美術館，文書館などの県の中核的な文化施設を集中配置した総合公園として，計画が進められている。ここでは，ただ単に公園内に文化施設を配置するというだけでなく，公園内を散策しながら野外彫刻にふれることができる，移築した民家を見ながら人々の生活の姿を博物館の展示と関連して理解する，あるいは，戸外に設けた緑陰テラスで読書を楽しむといったように，各文化施設の周辺に施設と関連の深いテーマの「森」（園地）を配することにより，公園全体が文化の香り高い一つの閲覧室，展示室であるかのような文化公園にしていく計画になっている。

文化施設の配置の大きな特色は，前述の4館に加え，文化の森全体の共通施設として文化情報コアを設置し，ここを中心として各施設が有機的につながった文化施設コンプレックスとして作りあげていこうという点である。各館はそれぞれ独自性を有するものの，施設の相互利用や一体利用など統合できる部分が少なくない。それだけでなく，複数の館による総合的な企画の催しや，また，ニューメディア技術を利用した様々な情報システムの整備により，県民にこれまでにない新しい文化情報を提供できる可能性がある。



文化の森完成模型

このように，文化の森の総合管理センターとしての役割を果たすとともに，文化の森および徳島県の文化情報センターとしての役割を果たすのが文化情報コアであり，博物館，近代美術館と一体の建物（3館棟）として建設が進められている。

文化の森は，昭和55年の構想発表後，用地取得や各館の基本構想の検討，公園および建物の設計等の作業を経て，60年8月に起工式を行い土木工事に着手した。追って62年8月には建物の建築工事に着手，64年秋の建物の完成，56年秋の5館同時開館を目ざして建設が進められている。

新しい県立博物館

(1) 基本構想

新しい博物館の基本構想は，58年3月に発足した博物館基本構想検討委員会（委員12名）による討議を経て，59年1月に「徳島県立博物館基本構想報告書」としてまとめられた。そこでは，新しい県立博物館を“人文科学（考古，歴史，民俗，古美術）と自然科学（動物，植物，地学）が有機的に結びついた総合博物館”と性格づけるとともに，①郷土に根ざし世界にひろがる博物館，②開かれた博物館，③研究を大切にする博物館，④文化財を守り，自然の保全をめざす博物館を目標にすることがうたわれている。この基本構想の理念にそって，建物の設計，展示計画をはじめ開設準備作業が行われているところである。

(2) 規模，施設，設備

61年度に行われた実施設計によれば，5館（図書館，博物館，近代美術館，文化情報コア，文書館）の総延床面積は32,318㎡，そのうち3館棟〔博物館＋美術館＋文化情報コア〕は21,549㎡となっている。3館は一体の建物になっているため，どれだけが博物館の面積かは一概には言いがたいが，約8,100㎡が博物館の専有部分であ

る。しかし，この他にも，文化情報コアのスペースとしてカウントされているイベントホール，集会展示室，インフォメーション，AVコーナー，レストラン等の共通・総合機能スペース，エントランスホール，通路，トイレ等の共用部分も当然，博物館でも利用するスペースになるので，実質的な博物館の建物規模は，基本構想でうたわれた10,000㎡に近いものと考えられる。

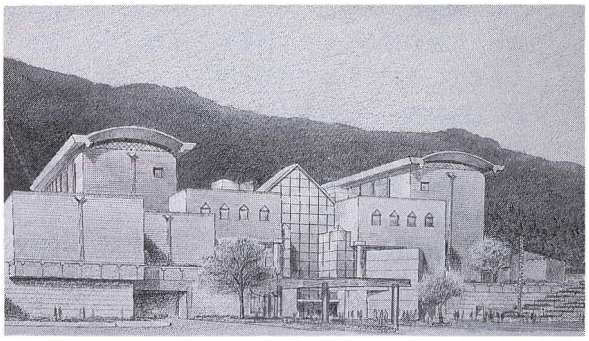
博物館内部施設・設備としても，基本構想に沿って，展示スペース，教育普及スペース，収蔵スペース，管理スペースの他，学芸員による資料の製作や調査研究活動が活発に行えるよう，有効なスペースを確保している。各分野の研究室・作業室の他，冷凍室，保存処理室，分析室，X線室，電子顕微鏡室等を配置し，各種機器類を備えるよう計画している。

(3) 展示計画

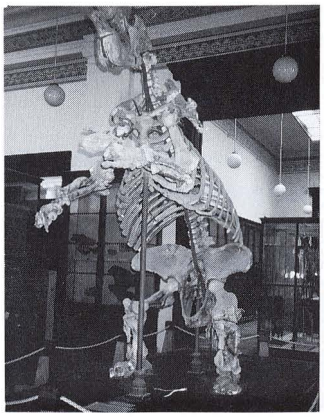
博物館の展示は，常設展示と企画展示とから成る。新しい常設展示の展示計画は，基本構想検討委員会を受け継いで発足した「博物館資料収集展示委員会（委員10名）」の13回に及ぶ討議を経て，62年３月に展示実施設計としてまとめられた。その結果，常設展示は“徳島の自然と歴史”の総合テーマのもとにストーリー展開された総合展示（約1,250㎡）と，分野ごとに分類展示を中心に行う部門展示（500㎡），それにラ・プラタ記念室（210㎡，後述）から構成されることになった。総合展示の大テーマとしては，次の７つを予定している。

①日本列島と四国の生いたち
②狩人たちの足跡
③ムラからクニへ
④古代・中世の阿波
⑤藩政のもとで
⑥近代の徳島
⑦徳島の自然とくらし

現在，この計画に従って，資料収集等の展示の具体化の作業も進めているところであるが，何といっても一番大きな課題は，現在の博物館の収蔵資料が乏しく，新展示に必要な資料の多くをこれから収集しなければならないことである。しかも，かなりの部分を購入にたよらざるを得ない。徳島県では，59年４月に美術品等取得基金を設置して，開館までの美術館および博物館資料の購入に対応することになっている。博物館資料の購入費はレプリカ等の購入も含めて約５億円である。



３館棟の正面　中央が文化情報コア，右ウィングが博物館，左ウィングが美術館。



メガテリウムの全身骨格
（63年度中にはラ・プラタ大学から贈られてくる予定）

(4) ラ・プラタ大学との資料交換

資料収集の一環として，徳島県では60年に「日本国徳島県とアルゼンチン共和国ラ・プラタ大学との相互贈与に関する合意書」を締結し，それに基づいて，南米の古生物資料（実物およびレプリカ）を入手している。このプロジェクトは，知事がアルゼンチンを訪問してラ・プラタ大学附属博物館を見学した際，館側から収蔵資料提供の示唆をうけたのがきっかけで，その後担当者を派遣して交渉を重ねた結果，３回に分けて南米の哺乳動物や恐竜の化石の贈与をうけることになったものである。

第１回の交換（相互贈与）は60年度に行われ，パノックスの甲羅と全身骨格をはじめ15点の化石が贈られた。これらは，現在，博物館に展示されている。２回目の交換は63年度に，また，３回目は67年度に行われることになっており，チタノサウルス，メガテリウム，マクラウケニア，トキソドン，スミロドン等の全身骨格（レプリカ）ほか，多数の南米特有の化石が贈られることになっている。

これらのラ・プラタ大学から贈られる古生物資料は，新しい博物館では一部を総合展示に組み込むほか，「ラ・プラタ記念室（仮称）」という特別コーナーを設けて展示することにしている。

以上，徳島における新しい県立博物館の構想と開設準備状況の一端について紹介させていただいた。いよいよ今年度中には一部の展示工事も始まることになっており，これまで以上にたいへんな局面を迎えようとしている。会員館園諸兄姉の変わらぬご支援ご協力をお願いする次第である。

滝川市美術自然史館

TAKIKAWA MUSEUM OF ART & NATURAL HISTORY

所在地　〒073
北海道滝川市新町2丁目5番30号
電　話　0152-23-0502
館長名　佐　藤　順　博

本館は，昭和61年9月滝川市の社会教育施設の集合している文化ゾーンの中核地にオープンした。館名に表現されているように美術部門と自然史部門を複合させた特徴ある施設である。

本館建設の大きな起因となった自然史部門には，昭和58年8月滝川市を流れ北海道の代表的河川と呼ばれる空知川河床から発見された海牛化石「タキカワカイギュウ」をメーンとして，地質古生物各分野でも学術的評価の高い海牛のレプリカ標本等を展示し，古生代から現代に至るまでの生物の生息環境の変化を大壁画に表現しながら，その時代にみられる化石及びレプリカ標本等大小合わせ300種500点ほどを展示している。

一方，本館の設置以前に基本構想が策定されていた郷土美術館建設計画が，前述したように立地的条件と市民の芸術文化の向上と芸術観賞機会の拡大を促すために，美術部門として複合させ相剰効果を図るとともに，施設前庭に化石の樹と云われるメタセコイヤ等を植樹し古代の環境を表現した化石の森を一体化させ特色づけをした。

1　施設の概要

建築面積　2,889.37㎡

建築構造　鉄筋コンクリート造2階建一部地下

1階　タイムトンネル，自然史展示室
レプリカ工房，収蔵庫，研究室
美術展示室，解剖室，事務室

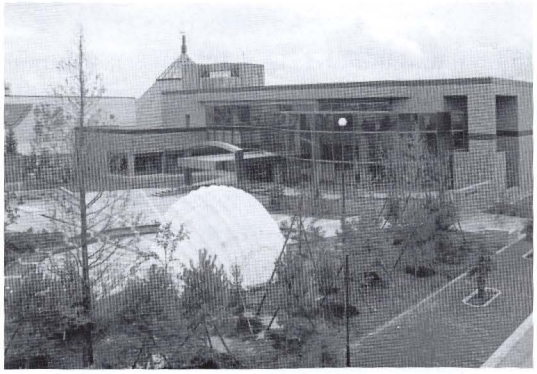
2階　自然史展示室，美術展示室（3室），空調機械室

地下　ボイラー室，ハロンボンベ室，監視室

2　展示の概要

・タイムトンネル　宇宙から地球の誕生を大型の電光パネルを用いて説明

・自然史展示室　2階部分まで吹抜けとし，上部壁面に古生代から新生代に至るまでの古代物大壁画（3メートル×40メートル）を展示し，タキカワカイギュウ，ヨルダニカイギュウ，ステラーカイギュウ，デスモスチルス，ティラノサウルス，キャンプトサウルス，マンモス，オオツノジカ，スミロドン等実物大のレプリカ標本多数展示するとともに，大壁画の下部にウインドーを埋め込みにし，その時代にみられる化石及びレプリカによる標本を展示している。



本館正面

・企画展示室　本館の主催及び協賛事業等多目的な展示会場であり，オープン以来毎日書道展，道展移動展，北海道教職員美術展等全国及び全道規模での美術展が開催され圏域での芸術観賞機会の拡大に大役を果たしている。

・常設展示室

岩崎英遠室～当市江部乙町出身である同画伯は，日本芸術院会員として今なを活躍している著名な日本画家である。

一木万寿三室～当市出身で日本美術家連盟会員として活躍，北海道の洋画界の重鎮としてその発展に大きく寄与された。

上田桑鳩室～わが国の前衛書道の今日的地位を確立した功労者であり，墨象の価値認識と創作の喜びを多くの書家に与えた。

・化石の森　生きた化石植物といわれるメタセコイヤやイチョウ等を植樹し，森を形成しながら鮮新世の時代の示準化石タカハシホタテのシェルパーと，滝川の象徴である太古の滝に海牛の親子と伝説の人魚像を配し，古代の滝川地方の情景をシンボル的に再現させ，散策する人々に大いに楽しんでもらっている。

宮崎科学技術館
MIYAZAKI SCIENCE CENTER

コスモランド

〒880　宮崎市宮脇町38番地3
☎0985－23－2700　FAX　0985－23－0791

宮崎科学技術館は次代を担う子供たちに，積極的に科学にふれる機会と場を提供していこうと，市制60周年（昭和59年4月）を記念して建設されたものです。昭和62年8月2日の開館以来，本年1月末現在で約130.000人の入館者を迎えています。当館の愛称は，コスモランドです。

◎施設の概要

敷地面積　5.400㎡　　建物延床面積　6.419.3㎡
建築構造　地上3階（一部4階）鉄筋コンクリート造，一部鉄骨造

◎主な構成

1F　太陽の都市・みやざき，科学図書室，パソコン研究室，科学実験室，科学工作室，無線室，多目的ホール
2F　科学のふしぎの国，豊かな生命の世界，先端技術の世界，エネルギーランド
3F　プラネタリウムホール（280席，身障者用4席）

1. 展示の概要

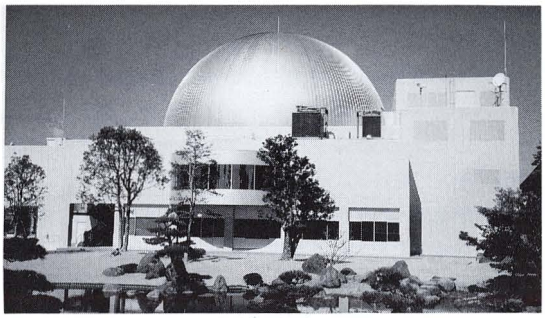
宮崎科学技術館の展示は次の4つの基本理念　a．

A.太陽の都市・みやざき　宮崎の豊かな自然と人々の紹介，地下に隠された遠い過去の情報，宇宙から見た地球・九州・宮崎。これらの情報を科学の目を通して多角的に紹介しています。

B.科学のふしぎの国　光・音・力・電気など科学体験のコーナーです。楽しく遊びながら五感を使って科学にふれることができます。

C.豊かな生命の世界　宮崎の豊かな自然，そしてそこに生棲するさまざまな生物たちを始め，DNAやバイオテクノロジーの紹介をしています。

エネルギーメリーゴーランド



本館正面

D.先端技術の世界　ここでは高性能ホストコンピュータを中心に館内6カ所，計22台のパソコンをネットワークしたコンピュータシステムが構築されています。来館者が自由に操作し，入力できる参加性の高いシステムと，11枚のビデオディスクを自由に検索できる映像システムから構成されており，子供たちの圧倒的な人気を得ています。

E.エネルギーランド　さまざまに姿を変えるエネルギーの世界を，太陽・水・電気の3つのエネルギーを中心に，楽しい実験装置で体験できるコーナーです。

2. プラネタリウムホール

当館の一番の目玉であるプラネタリウムはドーム直径27mと世界最大規模を誇ります。コンピュータ制御で惑星間を自由に航行できる最新鋭の投映機により，大ドームに実際の星空と見まごうばかりの25.000個の星々を映しだすことが出来，マルチスライドの迫力ある画面とあわせて，訪れる人々を感動させています。又，ここは10度の傾斜角のホールとなっており，前方に設けられたステージを利用して，星空コンサート，科学講演会などを開催しています。

3. 教育普及活動

科学実験教室，工作教室，パソコン教室，天文教室などを定期的に開催し，より深く学習したい子供や，老人，婦人たちの学習の場としています。又「友の会」活動も行っており（1月末で327人が加入），今後クラブ活動への発展も計画しています。

4. 今後に向けて

常に新しい情報やイベントを提供し，遊びの中から科学する心や，創造性を育める場として，今後とも積極的に活動していくことが，宮崎の地に生きづく科学技術館に課せられた使命であろうと考えています。